

近世非蔵人奉行の役割と文書実践

西 村 慎太郎

【要 旨】

本稿は近世朝廷において殿上の雑務に従事した非蔵人を統括した非蔵人奉行について、文書実践というアーカイブズ学的な側面からその役割を明らかにする。

非蔵人奉行は堂上公家の役職で、公卿が任じられた。確認できる限りでは羽林家の家格から就任されることが多く、30歳代に就任しているが、近世後半になるほど高齢化の傾向がみられる。なお、摂家・清華家で務めている者はいない。

非蔵人奉行の文書実践から確認できる役割は、①非蔵人の出勤管理、②武家伝奏からの幕府触・雑掌触伝達、③非蔵人の宿所届・改名届の管理、④非蔵人の相続の管理、⑤年次提出帳簿の管理、⑥非蔵人小番結改の管理である。非蔵人奉行は朝廷運営サイド（武家伝奏・議奏）と非蔵人番頭との間に位置し、文書の伝達を担ったものの、主体的な活動は確認できない。

一方で、文書実践の点からは非蔵人奉行の主体的な活動は見られなかったが、何か問題が生じた際、非蔵人より「内々」「御内命」などが期待されていた。

【目 次】

はじめに

1. 『禁中諸奉行補略』に見る非蔵人奉行に任じられた人物の特質
2. 非蔵人奉行の資料の概要
3. 非蔵人奉行の役割
4. 非蔵人奉行の役割の展開

おわりに

はじめに

本稿は、近世朝廷において宮中の雑務に従事した非蔵人を統括する非蔵人奉行について、文書実践というアーカイブズ学的な側面からその役割を明らかにするものである。非蔵人奉行は堂上公家の役職であり、様々な奉行のひとつである。

拙稿で述べたように、近世非蔵人の研究は、①幕末・明治維新史、②文化的力量、③朝廷運営における役割、④家柄・組織の4つの視角で進められてきた¹⁾。近年では非蔵人の和歌に関する資料翻刻が進められていて、彼らの文化的力量が明らかにされてきている²⁾。

一方で、基礎的な研究課題であるが、非蔵人の組織が十分に解明されていない。そして、これまでの非蔵人研究において、組織の長たる非蔵人奉行について全く検討されてこなかった。非蔵人奉行と非蔵人との関係はどのようなものであったか、非蔵人奉行と非蔵人を取り巻く文書実践という側面から非蔵人組織を明らかにしてみたい。文書実践とは、組織において文書の作成・授受・管理の総称である³⁾。

最初に近世非蔵人の概略を述べる。和田英松の『新訂官職要解』によれば、「家柄のよいものの子で、六位になっているもののなかから選んで補した。殿上駆使の役を勤めて、まったく事務見習のようなもの」で、「蔵人に非ずして蔵人のごとく昇殿をゆるされ御用を勤めるものであるから、名づけた」と述べている⁴⁾。その成立は『蔵人補任』延喜16年（916）条に「非」と記された人物が掲載されているので、10世紀段階には設置されていたものと思われるが、具体的な役割については不明といわざるを得ない⁵⁾。中世に至って、『職原抄』に「不奉行公事」と見えることから、蔵人のように朝廷儀式の奉行を務めることない存在であった⁶⁾。

戦国時代に非蔵人組織が断絶して、慶長11年（1606）に千倉兼之（平野社）・羽倉延次（稲荷社）・大西親明（稲荷社）・小野元辰（上御霊社）・松下以久（上賀茂社）の5名が非蔵人に補されることとなった⁷⁾。羽倉敬尚は近世非蔵人の再興について、「戦国乱離による諸社の退転衰頽を憂いられた、天皇の敬神の深慮から発議せられたもので、疲弊した社家の救済によつて、追々

-
- 1) 拙稿「近世非蔵人の成立と展開」（朝幕研究会編『論集近世の天皇と朝廷』岩田書院、2019年）。
 - 2) 大谷俊太・山中延之・加藤弓枝・大山和哉・藤原静香「藤島宗詔詠草紙背文書繙読 色紙奉行関連資料及び俳諧歌仙一卷」（『京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要』34、2021年）、同「蘆庵文庫蔵『院蔵人備亡』解題と翻刻」（『国文論藻 京都女子大学大学院文学研究科研究紀要』20、2021年）、同「『非蔵人盟約』と『歎歌道之興廃俳諧長歌二首』解題と翻刻 非蔵人の誠めと戯れ」（『京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要』35、2022年）、同「藤島宗順『詠草留』（安永六年分）解題と翻刻」（『国文論藻 京都女子大学大学院文学研究科研究紀要』22、2023年）、同「藤島宗順『安永六年稽古百首詠藻案』解題と翻刻」（『京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要』37、2024年）ほか。また、近年では社家と非蔵人の活動を総体として研究する山本遥大「禁裏外部での活動からみる近世非蔵人―新日吉社守護社職兼任非蔵人藤島宗詔を事例として―」（2024年4月20日第65回地方史研究協議会日本史関係卒業論文発表会）の視角も重要であろう。
 - 3) 渡辺浩一『日本近世都市の文書と記憶』（勉誠出版、2014年）。
 - 4) 和田英松『新訂官職要解』（講談社学術文庫、1983年）215頁。
 - 5) 『蔵人補任』（『続群書類従』四上、続群書類従完成会、1926年）334頁。
 - 6) 『標注職原抄校本』下（『新註皇学叢書』四、広文庫刊行会、1928年）397頁。
 - 7) 『非蔵人惣次第』（東京大学史料編纂所写真帳6143-70、原藏陽明文庫）、『非蔵人系譜』（東京大学史料編纂所蔵写本2075-1291）など。但し、『御再興非蔵人便覧』（東京大学史料編纂所蔵写本2043-26）では、千倉兼之の補任は吉田兼里（吉田社）と同じく元和3年12月出仕と記してある。

その仕うる主神諸社の再興復旧を資けられておる」と評価しているが⁸⁾、近世非蔵人設置の背景は、①諸社側による歎願、②六位蔵人の過重な負担を軽減するためであったことを前掲の拙稿で明らかにした。近世を通じての非蔵人の役割としては①禁中（特に清涼殿）の掃除、②公家の使者の取り扱い、③小番公家の膳や蒲団の給仕である。

1. 『禁中諸奉行補略』に見る非蔵人奉行に任じられた人物の特質

最初に非蔵人奉行に任じられた人物を検証して、その特質を明らかにしたい。

非蔵人奉行の成立時期については判然としない。但し、平松時章『非蔵人往反之備忘』には次のように記されている⁹⁾。

一、番頭被 仰出候事（番頭料是迄之通被下候事）、従伝奏被申渡、番頭へ申渡、当番議奏
江届之事（本人御礼如例也）、

（中略）

一、番代・別番・見習・御詰被加人数、

右同断、御詰被加候非蔵人も附武士通達之事、

（中略）

一、依所勞悴江家督相続相願被仰出候事、

右同断、

番頭の任命、番代などへの加入、家督相続は武家伝奏より番頭へ申し渡し、議奏へ届を出すことと記されており、ここには非蔵人奉行の関与がうかがえない。「非蔵人往反之備忘」の成立は不明ながら、もともとは武家伝奏が非蔵人を管理していたものの、武家伝奏の業務繁多であることを受けてこれらの管理を非蔵人奉行が担うことになったものと思われる。あるいは武家伝奏の非蔵人に関わる業務を分離させるため非蔵人奉行が設置された可能性もある。おそらく、後述する『禁中諸奉行補略』が成立した近世半ば頃に設置されたのではなかろうか。

非蔵人奉行は2名であるが、近世を通じて非蔵人奉行に任じられた者を明らかにできる史料はほとんどなく、わずかに宮内庁書陵部蔵『禁中諸奉行補略』68冊のみである¹⁰⁾。これは「地下官人之棟梁」¹¹⁾のひとつである壬生官務家旧蔵本であり、最も古いもので延享4年（1747）、最も新しいもので天保12年（1841）であるが、途中、欠本もある。御記録・御字書・御歌書并御手本・御会・御色紙・御服・御太刀・御楽器・御硯文台并御小道具・御屏風・御献・紫宸殿・清涼殿・小御所・御学問所・修理職・能・小番・非蔵人の順番で、各奉行の名前が記されている。

なお、『禁中諸奉行補略』は表紙に記された年代と内容が異なっているものが2冊ある。この点を明らかにしておこう。

ひとつは寛政元年（1789）分で、ここには「冷泉中納言」と「三条中納言」が非蔵人奉行として記されているが、同年は上冷泉為章が権中納言であるものの、三条実起は権大納言である。そのため、他の奉行を検証したが、多くの奉行の苗字と官職が合致しない。そこで他の年代の

8) 羽倉敬尚「『赤塚芸庵雜記』解題並凡例」（『赤塚芸庵雜記』神道史学会、1970年）3頁。

9) 平松時章『非蔵人往反之備忘』（京都大学図書館蔵平松文庫第参門ヒ-1）。

10) 『禁中諸奉行補略』（宮内庁書陵部蔵54250-壬185）。

11) 「地下官人之棟梁」については、拙著『近世朝廷社会と地下官人』（吉川弘文館、2008年）参照。

非蔵人奉行一覧

	人名	年齢	官位	家格	兼任奉行	昇進・その後の 役職など	人名	年齢	官位	家格	兼任奉行	昇進・その後の 役職など	備考
延享4	甘露寺親長	35	従三位権中納言	名家	小御所	2.1叙正三位	葉室頼要	33	正四位上参議左大臣 弁	名家	御記・御献・能	1.5叙従三位。寛延4 ～安永3歳奏	
宝暦2	正親町三条 公頼	32	正三位権中納言大 宰権帥	大臣家	御記録・御歌書并御手 本・御色紙・御服・御学 問所		上冷泉為村	41	正三位権中納言	羽林家	御会・小番	2.26叙従二位。4.29辞 官	「禁中諸奉行補略」 では寛政元年
宝暦3	正親町三条 公頼	33	正三位権中納言大 宰権帥	大臣家	御記録・御歌書并御手 本・御色紙・御服・御学 問所	宝暦4～宝暦8歳奏	正親町実連	34	従三位参議右中将 遠江權守	羽林家	小御所	12.15任権中納言	
宝暦8	坊城俊逸	32	正三位権中納言	名家	御記・御歌書并御手本・ 御会・御学問所	7.24止官	四辻公享	31	従三位参議左中将	羽林家	御楽器		
宝暦9	山科頼言	38	正三位権中納言大 宰権帥	羽林家	御服・御太刀・修理職 具・御学問所	2.15全奉行免(同日よ り歳奏)。12.24従二 位。宝暦9～明和3歳 奏	四辻公享	32	従三位参議右中将	羽林家	御楽器	9.25叙正三位。11.6任 権中納言	
宝暦10	綾小路有美	38	正三位参議	羽林家	御服・御祝文台并御小道 具・御学問所	3.1被加							
宝暦14	綾小路有美	39	正三位参議	羽林家	御服・御祝文台并御小道 具・御学問所	3.9辞参議。3.10任権中 納言。12.26叙従二位。 明和7～明和8歳奏	四辻公享	33	正三位権中納言	羽林家	御楽器		
宝暦13	上冷泉為泰	29	従三位右兵衛督	羽林家	御歌書并御手本・御会・ 御色紙		四辻公享	36	従二位権中納言右 衛門督使別当	羽林家	御楽器	3.1兼右衛門督使别当	
宝暦14 明和元	橋本実理	39	從四位上参議右中 將	羽林家	清凉殿	5.15叙正四位下	四辻公享	37	従二位権中納言右 衛門督使別当	羽林家	御楽器	6.26辞右兵衛督	
明和3	橋本実理	41	正四位下参議右中 將丹波權守	羽林家	清凉殿	2.5叙従三位	四辻公享	39	正二位権中納言	羽林家	御楽器	3.6任権大納言	
明和5	橋本実理	43	正四位下参議右中 將丹波權守	羽林家	清凉殿		四辻公享	41	従二位権大納言	羽林家	御楽器・御屏風・御学問 所・能		「禁中諸奉行補略」 では寛政2年
明和6	正親町実連	50	正二位前権大納言	羽林家	小御所	再任	四辻公享	42	正二位権大納言	羽林家	御楽器・御屏風・御学問 所・能		
明和7	正親町実連	51	正二位前権大納言	羽林家	小御所		四辻公享	43	正二位権大納言	羽林家	御楽器・御屏風・御学問 所・能		
明和7. 11.24～	正親町実連	51	正二位前権大納言	羽林家	小御所		橋本実理	45	正三位参議右中将	羽林家	御屏風・御学問所・修理 職	再任。8.4兼近江權守	
明和8	正親町実連	52	正二位前権大納言	羽林家	小御所		橋本実理	46	正三位参議右中将 近江權守	羽林家	御屏風・御学問所・修理 職		
明和9 安永元	正親町実連	53	正二位前権大納言	羽林家	小御所		橋本実理	47	正三位参議右中将 近江權守	羽林家	御屏風・御学問所・修理 職	2.14任権中納言。明和 9～天明3歳奏	
安永2	正親町実連	54	正二位前権大納言	羽林家	小御所・小番		梅園実純	47	正三位前参議	羽林家	御服・御学問所		
安永3	正親町実連	55	正二位前権大納言	羽林家	小御所・小番		梅園実純	48	従二位前参議	羽林家	御服・御学問所		
安永4	正親町実連	56	正二位前権大納言	羽林家	小御所・小番		梅園実純	49	従二位前参議	羽林家	御服・御学問所		
安永5	正親町実連	57	正二位前権大納言	羽林家	小御所・小番		梅園実純	50	従二位前参議	羽林家	御服・御学問所		
安永6	正親町実連	58	正二位前権大納言	羽林家	小御所・小番		梅園実純	51	従二位前参議	羽林家	御服・御学問所		

安永10 天明元	鷲尾隆建	41	従二位権中納言	羽林家	小御所	寛政5～ 文化元議奏 文化元議奏 天明3.5就任。文化11 ～文化14議奏	梅園実純	55	従二位前参議	羽林家	御服・御殿・御学問所		
天明3	平松時章	30	従三位右兵衛権左	名家	-		梅園実純	57	従二位前参議	羽林家	-		典拠：平松時章『非 藏人奉行権記』
天明4	松本宗美	45	正二位権中納言	羽林家	小御所		梅園実純	58	従二位前参議	羽林家	御服・御学問所		
天明5	松本宗美	46	正二位権中納言	羽林家	小御所		日野資枝	49	正二位前権中納言	名家	御歌書并御手本・御学問 所	1.25任権大納言	
寛政3	日野資矩	36	正二位権中納言	名家	御記・御歌書并御手本・ 御色紙・御会・御服・小 御所・修理職	1.25任権大納言	庭田重嗣	35	従二位権中納言	羽林家	小御所		
寛政4	日野資矩	37	正二位権中納言	名家	御記・御歌書并御手本・ 御色紙・御会・御服・小 御所・修理職		庭田重嗣	36	従二位権中納言	羽林家	小御所		
寛政5	日野資矩	38	正二位権中納言	名家	御記・御歌書并御手本・ 御色紙・御会・御服・小 御所・修理職		庭田重嗣	37	従二位権中納言	羽林家	小御所		
寛政8	日野資矩	41	正二位権中納言	名家	御記・御歌書并御手本・ 御色紙・御会・御服・御 楽器・小御所・修理職	4.24任権大納言	庭田重嗣	40	従二位権中納言	羽林家	小御所		
寛政9	日野資矩	42	正二位権大納言	名家	御記・御歌書并御手本・ 御色紙・御会・御服・御 楽器・小御所・修理職		庭田重嗣	41	従二位権中納言	羽林家	小御所	3.30任権大納言	
寛政10	日野資矩	43	正二位権大納言	名家	御記・御歌書并御手本・ 御色紙・御会・御服・御 楽器・小御所・修理職		庭田重嗣	42	従二位権大納言	羽林家	小御所	1.5叙正二位。5.7兼按 察使	
寛政11	日野資矩	44	正二位権大納言	名家	御記・御歌書并御手本・ 御色紙・御会・御服・御 楽器・小御所・修理職	3.16辞権大納言。寛政 11～享和3議奏	庭田重嗣	43	正二位権大納言按 察使	羽林家	小御所		
寛政12	広橋胤定	31	正三位権中納言	名家	御記・御字書・御殿・小 御所		庭田重嗣	44	正二位権大納言按 察使	羽林家	小御所		
寛政13 享和元	広橋胤定	32	正三位権中納言	名家	御記・御字書・御殿・小 御所		庭田重嗣	45	正二位権大納言按 察使	羽林家	小御所	4.19辞権大納言	
享和2	広橋胤定	33	正三位権中納言	名家	御記・御字書・御殿・小 御所	1.5叙従二位。1.22兼左 衛門督使別当	橋本実誠	45	従三位参議左中将	羽林家	清凉殿・小番		
享和3	広橋胤定	34	従二位権中納言左 衛門督使別当	名家	御記・御字書・御殿・小 御所	1.10辞別当。10.25権大 納言	橋本実誠	46	従三位参議左中将	羽林家	清凉殿・小番		
享和4 文化元	広橋胤定	35	従二位権大納言	名家	御記・御字書・御会・御 殿・小御所		橋本実誠	47	従三位参議左中将	羽林家	清凉殿・小番	2.18叙正三位	
文化2	広橋胤定	36	従二位権大納言	名家	御記・御字書・御会・御 殿・小御所	11.23叙正二位	橋本実誠	48	正三位参議左中将	羽林家	清凉殿・小番		
文化4	広橋胤定	38	正二位権大納言	名家	御記・御字書・御会・御 殿・御学問所	文化10～14議奏。文化 14～天保2武家伝奏	橋本実誠	50	正三位参議左中将	羽林家	清凉殿・小番		
文化7	四条隆師	55	正二位前権大納言	羽林家	御硯文并御小道具・御 殿・御学問所		橋本実誠	53	従二位参議左中将	羽林家	清凉殿・小番	9.17任権中納言	
文化8	四条隆師	56	正二位前権大納言	羽林家	御硯文并御小道具・御 殿・御学問所	2.2脱	橋本実誠	54	従二位権中納言	羽林家	清凉殿・小番		

文化9	八条隠礼	49	従二位前参議	羽林家	御色紙・御服・御字問所・能		橋本実誠	55	従二位権中納言	羽林家	清凉殿・小番	
文化10	八条隠礼	50	従二位前参議	羽林家	御色紙・御服・御字問所・能		橋本実誠	56	従二位権中納言	羽林家	清凉殿・小番	
文化11	八条隠礼	51	従二位前参議	羽林家	御色紙・御服・御字問所・能		橋本実誠	57	従二位権中納言	羽林家	清凉殿・小番	
文化12	梅園実兄	51	従二位参議	羽林家	御服・御太刀・御屏風・御歌・御字問所		橋本実誠	58	従二位権中納言	羽林家	清凉殿・小番	3.22叙正二位
文化13	梅園実兄	52	従二位参議	羽林家	御服・御太刀・御屏風・御歌・御字問所	2.16辞参議	橋本実誠	59	正二位権中納言	羽林家	清凉殿・小番	
文化14	梅園実兄	53	従二位前参議	羽林家	御服・御太刀・御屏風・御歌・御字問所		滋野井公敏	50	正二位前権大納言	羽林家	小御所	
文化15 文政元	梅園実兄	54	従二位前参議	羽林家	御服・御太刀・御屏風・御歌・御字問所		滋野井公敏	51	正二位前権大納言	羽林家	小御所	
文政2	梅園実兄	55	従二位前参議	羽林家	御服・御太刀・御屏風・御歌・御字問所		滋野井公敏	52	正二位前権大納言	羽林家	小御所	
文政3	梅園実兄	56	従二位前参議	羽林家	御服・御太刀・御屏風・御歌・御字問所		滋野井公敏	53	正二位前権大納言	羽林家	小御所	
文政4	梅園実兄	57	従二位前参議	羽林家	御服・御太刀・御屏風・御歌・御字問所		滋野井公敏	54	正二位前権大納言	羽林家	小御所	
文政5	梅園実兄	58	従二位前参議	羽林家	御服・御太刀・御屏風・御歌・御字問所		滋野井公敏	55	正二位前権大納言	羽林家	小御所	
文政6	久世通理	42	正三位	羽林家	御歌書并御手本・御色紙・御屏風・御字問所・修理職		滋野井公敏	56	正二位前権大納言	羽林家	小御所	
文政7	久世通理	43	正三位	羽林家	御歌書并御手本・御色紙・御屏風・御字問所・修理職	10.28任参議。11.11辞参議	滋野井公敏	57	正二位前権大納言	羽林家	小御所	
文政8	久世通理	44	正三位前参議	羽林家	御歌書并御手本・御色紙・御屏風・御字問所・修理職	1.25叙従二位	滋野井公敏	58	正二位前権大納言	羽林家	小御所	
文政9	久世通理	45	従二位前参議	羽林家	御歌書并御手本・御色紙・御屏風・御字問所・修理職		滋野井公敏	59	正二位前権大納言	羽林家	小御所	
文政10	久世通理	46	従二位前参議	羽林家	御歌書并御手本・御色紙・御屏風・御字問所・修理職		三室戸能光	59	従二位前参議	名家	紫宸殿	
文政11	勘解由小路 資善	51	従二位参議	名家	御字書・御硯台并御小道具・御歌・御字問所・能		三室戸能光	60	従二位前参議	名家	紫宸殿	
文政13 天保元	勘解由小路 資善	53	従二位参議	名家	御字書・御硯台并御小道具・御歌・御字問所・能		四条隆生	39	正三位参議	羽林家	紫宸殿	10.22叙従二位
天保2	勘解由小路 資善	54	従二位参議	名家	御字書・御硯台并御小道具・御屏風・御字問所・修理職・能	3.8辞参議	四条隆生	40	従二位参議	羽林家	紫宸殿	
天保3	勘解由小路 資善	55	従二位前参議	名家	御字書・御硯台并御小道具・御屏風・御字問所・修理職・能	天保3～天保10議奏	四条隆生	41	従二位参議	羽林家	紫宸殿	

近世非藏人奉行の役割と文書実践（西村）

天保4	柳原隆光	41	従三位権中納言	名家	御記・御会・御学問所		四条隆生	42	従二位参議	羽林家	紫宸殿	6.26任権中納言
天保5	柳原隆光	42	従三位権中納言	名家	御記・御会・御学問所	4.14叙正三位	四条隆生	43	従二位権中納言	羽林家	紫宸殿	10.27叙正二位
天保6	柳原隆光	43	正三位権中納言	名家	御記・御会・御楽器・御学問所		四条隆生	44	正二位権中納言	羽林家	紫宸殿・小番	
天保7	柳原隆光	44	正三位権中納言	名家	御記・御会・御楽器・御学問所	12.19叙従二位	四条隆生	45	正二位権中納言	羽林家	紫宸殿・小番	
天保8	柳原隆光	45	従二位権中納言	名家	御記・御会・御服・御楽器・御服・御学問所		四条隆生	46	正二位権中納言	羽林家	紫宸殿・小番	
天保9	柳原隆光	46	従二位権中納言	名家	御記・御会・御服・御楽器・御服・御学問所		伏原宣明	49	正三位	半家	御字書・紫宸殿	
天保10	柳原隆光	47	従二位権中納言	名家	御記・御会・御服・御楽器・御服・御学問所	11.25任右衛門督使別当	伏原宣明	50	正三位	半家	御字書・紫宸殿	
天保11	柳原隆光	48	従二位権中納言右衛門督使別当	名家	御記・御会・御服・御楽器・御服・御学問所	1.4叙正二位	伏原宣明	51	正三位	半家	御字書・紫宸殿	
天保12	柳原隆光	49	正二位権中納言右衛門督使別当	名家	御記・御会・御服・御楽器・御服・御学問所	12.10辞右衛門督使別当	四条隆生	50	正二位権中納言	羽林家	紫宸殿	再任
安政5	三条西季知	48	従二位権中納言	大臣家	-		日野資宗	44	正三位参議右衛門督使別当	名家	-	典拠：三条西季知 『安政五年非藏人奉行』『安政七年非藏人奉行雑註』
安政6	三条西季知	49	従二位権中納言	大臣家	-		日野資宗	45	正三位権中納言右衛門督使別当	名家	-	典拠：三条西季知 『安政五年非藏人奉行』『安政七年非藏人奉行雑註』
安政7	三条西季知 万延元	50	従二位権中納言	大臣家	-		日野資宗	46	従二位権中納言	名家	-	典拠：三条西季知 『安政五年非藏人奉行』『安政七年非藏人奉行雑註』
文久元	三条西季知	51	従二位権中納言	大臣家	-	1.23叙正二位	野宮定功	46	従三位参議左中將	羽林家	-	典拠：三条西季知 『安政五年非藏人奉行』『安政七年非藏人奉行雑註』
文久2	三条西季知	52	正二位権中納言	大臣家	-		野宮定功	48	正三位参議左中將	羽林家	-	典拠：三条西季知 『安政五年非藏人奉行』『安政七年非藏人奉行雑註』
							広橋胤保	44	正三位参議左大弁 造興福寺長官	名家	-	典拠：三条西季知 『安政五年非藏人奉行』『安政七年非藏人奉行雑註』

※備考に記した史料を除き、典拠は『細略』（宮内庁書陵部蔵）による。兼任奉行の-は不明なもの。

奉行を確認したところ、例えば、御記録奉行を務めた「醍醐大納言」「三条中納言」「久我中納言」「徳大寺中納言」「坊城頭弁」が宝暦2年（1752）の醍醐兼潔・正親町三条公積・久我敏通・徳大寺公城・坊城俊逸に該当することから、寛政元年分の『禁中諸奉行補略』は宝暦2年のものであり、冷泉中納言は上冷泉為村、三条中納言は正親町三条公積に比定できる。

もうひとつは寛政2年分で、ここには「四辻大納言」と「橋本宰相中將」が非藏人奉行として記されているが、同年は四辻公萬が参議兼右中將、橋本実理が前権大納言で一致しない。そこで四辻大納言と橋本宰相中將が非藏人奉行を務めている時期を検討したところ、宝暦14年から明和6年（1769）がこのふたりの組み合わせであった。そして、四辻公亨が権大納言に任じられたのは明和3年3月6日であることから寛政2年分として伝来した『禁中諸奉行補略』は明和4年・5年のいずれかであることがうかがえる。さらに、紫宸殿奉行に名を連ねる「四条中納言」は四条隆叙に比定されるが、彼は明和4年11月28日に権大納言に昇進している。同様に清凉殿奉行に名を連ねる「野宮前中納言」は野宮定之に比定されるが、彼は明和4年11月15日に権大納言に昇進していることから、寛政2年分の『禁中諸奉行補略』は明和5年のものであり、「四辻大納言」は四辻公亨、「橋本宰相中將」は橋本実理に比定できる。

以上、『禁中諸奉行補略』の寛政元年は宝暦2年、寛政2年は明和5年の誤りであり、【非藏人奉行表】はこの比定を踏まえたものとしている。

次に非藏人奉行の年齢と官位を確認してみたい。欠本があるため、必ずしも就任した年は判然としないが、最も若いのは宝暦13年に務めた上冷泉為泰の29歳で、【非藏人奉行表】に記載した近世中期の多くは30歳代に就任しているが、文化期になるほど高齢化の傾向が見て取れ、40歳代・50歳代が務めている。官位は全て公卿である（前官も含む）。他の奉行の場合、公卿に満たない公家も就任しており、また後に武家伝奏・議奏といった朝廷運営に関与する役職に就任した者もいることから、非藏人奉行は朝廷内部でも一定の地位にいた者が就任した役職と位置付けられよう。なお、複数の奉行を兼任している者もいることがうかがえる。

最後に非藏人奉行に任じられた公家の家柄について確認してみたい。『禁中諸奉行補略』以外の資料も含め、最も多いのは羽林家で19名、次に名家の12名であった。また、宝暦年間の正親町三条公積や幕末の三条西季知が就任したり、後述するように天明3年（1783）に大臣家の中院通古に就任を打診されていることから、必ずしも大臣家が非藏人奉行に就くことが異例ではなかったようだが、摂家・清華家で務めている者はいない。

2. 非藏人奉行の資料の概要

ここでは非藏人奉行自身が執筆した書付・日記類の概要を述べたい。管見の限り、非藏人奉行本人ないし関係者が執筆した日記類は4点確認できる。

①平松時章『非藏人往反之備忘』¹²⁾。この史料は表紙に「此一冊借用鷺尾黄門隆建卿書写之非藏人奉行先輩〈橋本実理卿備忘哉〉被記置云々、此内誤字等相見、難読得之处有之、本之儘写留了」と記されているように、鷺尾隆建から借用したものであり、非藏人奉行を務めた橋本実理の備忘録を書写したものであることが記されている。また、②の平松時章『非藏人奉行雜記』

12) 前掲註9『非藏人往反之備忘』。

の天明3年（1783）5月13日条には次のような記述が見える。

次詣鷺尾亭、謁黄門、彼卿先年非蔵人奉行被勤之間、委敷留於有之者令借用度旨申入之處、領狀、先年奉行中之委記三冊被借之、其外心得ニ可成義共被口演也、一礼申入了、次詣梅園亭、相奉行万端宜頼入候旨申入、依留守以取次青侍申置了、帰家々僕郡司梅園家へ遣、万端為聞合也、後刻從梅園家使者来、明和八年非蔵人奉行雜記二冊、外ニ非蔵人往来備忘（是ハ橋本前重相奉行之時之留也、彼家被写留由云々）一冊等被借之、緩々可遂一覽由被示、早速借用忝旨返答申遣了、¹³⁾

非蔵人奉行に就任した平松時章は以前奉行を務めていた鷺尾隆建邸に赴き、「奉行中之委記三冊」を借用している。また、「相奉行」、すなわち同役である梅園実繩邸へ挨拶に行ったが留守であったため、青侍に取り次ぎを依頼し、のちに平松家の家臣である郡司を梅園邸へ遣わした。後に梅園家の家臣がやって来て「明和八年非蔵人奉行雜記二冊」とともに橋本実理が執筆した「非蔵人往来備忘」を借り受けている。『非蔵人往反之備忘』の表紙に記載された内容と『非蔵人奉行雜記』の記述とに若干の相違があるものの、いずれにしても先輩奉行から「委敷留」「奉行中之委記」を借用して、書写し、業務に備えようとしている様子がうかがえる。なお、当時の平松時章は従三位右兵衛権佐で30歳であった。

②平松時章『非蔵人奉行雜記』¹⁴⁾。天明3年5月12日からはじまる日記で、同月24日まで書かれている。12日条に議奏から明13日巳刻に参るべき旨を記した御用状が到来した。翌13日条には次のように記されている。

巳刻参 内、以御詰非蔵人唯今参入之由申入、于議奏之處当番六條前中納言承知之旨也、暫而六條被招予、於御詰廊下被申渡云、被加非蔵人奉行由也、即御請申入了、伝聞中院中納言被申御理、其替云々、相奉行梅園前宰相也、彼卿今日在 朝之間遂面謁、万事宜頼入候旨申述、差当心得ニ相成候事も候ハ、承置度旨申入之處、粗被演説了、尚亦雜記等も有之候間、可被借写之旨也、

議奏の六条有栄に呼ばれて、非蔵人奉行就任の打診を受けた。即座に了承したが、これは中院通古が辞退したことによる代わりであること伝えられた。諸奉行は基本的に天皇の身边に関わる業務なので、議奏から奉行就任が伝えられたのであろう。すでに朝のうちに「相奉行」である梅園実繩と宮中で会い、簡単に業務を聞いている。また、「雜記等」もあるので借用して写し取る方が良いとの助言も得た。これが①に記した「明和八年非蔵人奉行雜記二冊」と既述の橋本実理執筆の「非蔵人往来備忘」のことであろう。

③久世通理『非蔵人御奉行日記』¹⁵⁾。文政9年（1826）から同10年の久世通理が非蔵人奉行在職時の日記である。通理自身や「相奉行」、その他堂上公家に対して敬意表現が用いられていることから筆者は久世家家臣と思われ、異筆であることから複数が執筆したようである¹⁶⁾。久世通理は文政9年当時従二位前参議で45歳であった。なお、久世通理の当主日記も文政10年分につ

13) 平松時章『非蔵人奉行雜記』（京都大学図書館蔵平松文庫第参門ヒ-2）。天明3年（1783）5月13日条。

14) 前掲註9『非蔵人奉行雜記』。

15) 久世通理『非蔵人御奉行日記』（国文学研究資料館蔵京都久世家文書207）。

16) 久世家の家臣団については、拙稿「近世堂上公家の家司—久世家を事例に一」（日本史史料研究会監修・中脇聖編著『家司と呼ばれた人々』ミネルヴァ書房、2021年）。

いては遺されているが¹⁷⁾、非蔵人奉行としての活動は記されていない。このことから非蔵人奉行としての実務は当主とともに久世家家臣が重要な役割を担ったものと推測される。奉行のみならず、公家家臣のうち家政を担う雑掌は朝廷運営の下支えをしており¹⁸⁾、非蔵人奉行の場合も同様であった。

④三条西季知『安政五年非蔵人奉行』『安政七年非蔵人奉行雑誌』¹⁹⁾。『安政五年非蔵人奉行』は安政5年（1858）12月19日～同6年まで、『安政七年非蔵人奉行雑誌』は安政7年～文久2年（1862）までである。当時の非蔵人奉行は安政5年12月27日条の「非蔵人奉行月割」に「季知」「右衛門督」と記されていることから三条西季知と参議兼右衛門督であった日野資宗であることがうかがえる。そして、「季知」との記述と同6年2月20日条に「日野へも申入置」の記述があることから、三条西季知が執筆者であるものと思われる。なお、安政5年当時、三条西季知は従二位、48歳である。清水谷家文書の中に三条西季知が執筆した日記類が含まれている理由は判然としないものの、清水谷家文書は1951年に古書店より旧文部省史料館が購入した文書群で、国文学研究資料館には京都三条西家文書も所蔵されており、1948年に原蔵者から旧文部省史料館へ譲渡されているため、何らかの事情で混入した可能性がある。

これらの資料を用いて、非蔵人奉行の役割と文書実践について述べてみたい。

3. 非蔵人奉行の役割

ここでは拙稿²⁰⁾で試みたように文書実践、すなわち、組織を取り巻く文書作成・授受・管理に注目して非蔵人奉行の役割を検討する。以下、6点の非蔵人奉行の役割を、主に久世通理『非蔵人御奉行日記』から明らかにしたい。

①非蔵人の出勤管理。奉行は非蔵人の出勤・欠勤・服喪の届けを管理している。

（文政9年正月23日条）

一、明日之小番依所勞昼夜御断申上候、所勞未耽与無御座候間、乍略儀再度御断申上間敷候、猶出勤之節御届可申上候、以上、
正月廿三日

安田佐渡親宙

（同年2月3日条）

一、鴨脚出羽より届書来
末女昨夜死去仕候、無服瘍暇二日引籠候、仍御届申上候、以上
二月三日

17) 久世通理『文政十年自正月一日日記』（国文学研究資料館蔵京都久世家文書107）。

18) 拙稿「近世後期堂上公家勤修寺家の雑掌について—蔵人方地下官人袖岡文景『家記』を事例に一」（『史料館研究紀要』34、2003年。のちに改稿して「堂上公家雑掌の地下官人」（拙著『近世朝廷社会と地下官人』吉川弘文館、2008年））。

19) 三条西季知『安政五年非蔵人奉行』『安政七年非蔵人奉行雑誌』（国文学研究資料館蔵京都清水谷家文書59-1・59-2）。

20) 拙稿「糸会所の記録作成・授受・管理と機能—記録管理システムと専売制—」（国文学研究資料館編『近世大名のアーカイブズ資源研究—松代藩・真田家をめぐって—』思文閣出版、2016年）において、松代藩糸会所をめぐる文書作成・授受といった文書実践を検討し、松代藩専売制の様相を検討した。

鴨脚出羽春安

（同年2月4日）

一、参上

鴨脚出羽

右昨日御届ケ申上候無服瘍引込候処、今日出仕之御届申上候由申置、

（同年4月8日条）

一、参上

大西河内

右者久々所労ニ而引籠罷在候、従明九日小番出仕仕候ニ付、御届申上候、²¹⁾

所労のため出仕できない安田佐渡は届書を奉行へ提出している。再び出仕することとなったら、4月8日条の大西河内のように、文書ではなく奉行を訪れて出仕の旨を述べている。同様に鴨脚出羽は末女の死去に伴い、届書を奉行のもとに届け、忌明けの際は本人が奉行邸を訪れて出仕する旨を伝えている。なお、届書は簡単なものであるため、切紙で届けられた。久世通理『非蔵人御奉行日記』文政10年（1827）6月7日条には吉見紀伊の長期間の休業に対して「所労長断之切紙至来之事」と記している。このように非蔵人の出勤・欠勤・服喪は当該非蔵人が直接非蔵人奉行へ伝達し、欠勤については文書管理されている。

②武家伝奏からの幕府触・雑掌触伝達。幕府の触や朝廷から発せられる触は武家伝奏の雑掌（平堂上の家政を預かる家臣）より堂上公家・地下官人・非蔵人などへ伝達された。

（文政9年8月8日条）

一、非蔵人口江雑掌触式通御達之處、讃岐（非蔵人当番番頭松室讃岐）落手也、

（同年11月17日条）

当二月五日夜常州行方郡行戸村百姓清右衛門江疵為負、逃去ル同人悴清吉人相書

（人相書中略）

右之通之もの於有之者、其所ニ留置、御料者御代官、私領者領主・地頭江申出、夫より於江戸石川主水正（勘定奉行石川忠房）方江可申出、若及見聞候者、其段も可申出候、尤家来・又もの等を入念可遂吟味候、隠置、脇より相知候者可為曲事候

戌十月

口上覚

別紙之通、武辺より申来候而、此段非蔵人中へ可被仰渡旨、右之通可申入由両伝被申付、如此候、以上、

十一月十六日

両伝奏雑掌

滋野井前大納言様（非蔵人奉行）

久世前宰相様（非蔵人奉行）

御家来中

追而御廻覧後、広橋家（武家伝奏広橋胤定）へ御廻可被成候、

文政9年8月8日条では武家伝奏の雑掌触が届いたので、禁裏の非蔵人口において番頭を務めている松室讃岐へ渡している。また、11月17日条では幕府からの人相書が武家伝奏のもとに届いて、非蔵人へ廻覧する旨を求めている。以上の事例から、触の類は武家伝奏雑掌→非蔵人

21) 前掲註15『非蔵人御奉行日記』。

奉行→非蔵人当番番頭→非蔵人と廻覧されて、再び、非蔵人奉行から武家伝奏へと戻されていることがうかがえよう。

③非蔵人の宿所届・改名届の管理。非蔵人の居住地と改名に関する手続きを行っている。

（文政9年正月27日条）

一、滋野井様より非蔵人分限帳并四ツ折壺通到来也、

四ツ折写し

松室土佐

文政七年九月烏丸通下立売下ル町菱屋与三郎家江借宅住居仕候、

吉見壺岐

同八年二月十七日父伊豆家督相続被仰付、同月十九日父伊豆死去仕候、住所是迄之通伏見藤森墨染上ル新町自宅住居仕候、

橋本安芸

同年三月廿七日父駿河守上北面被仰付ニ付、非蔵人ニ被 召出、住所室町頭下柳原南側父駿河守自宅同居仕候、

松室筑後

同年六月二日父伯耆守上北面被 仰付ニ付、非蔵人家督相続被 仰付、住所是迄之通今出川通小川東へ入上ル北兼康町父伯耆守自宅同居仕候、

藤島長門

同年七月五日常陸与改名、

赤塚豊前

同年十月四日出雲与改名、

松室伊賀

同九年正月廿二日日向与改名、

右之通ニ御座候、仍御届申上候、以上、

正月廿四日

松室讃岐（番頭）

文政9年正月27日、久世通理は同役の非蔵人奉行である滋野井公敬より非蔵人分限帳（後述）と宿所・改名を記した書付が送られてきた。この時の当番が滋野井で、久世は非番だったためと思われる。その後、2月朔日に滋野井家雑掌が次のような書付を久世家に持ってきた。

（同年2月朔日条）

町奉行（京都町奉行）より御附へ紙面之写

御紙面之趣致承知候、被遣候書付之内吉見壺岐義、伏見支配之義ニ付、先例相糺候処、文化十二亥年八月伏見海道稻荷中之町ニ住居いたし候松尾日向其外宿所之義ニ付、松室豊後差出候届書被遣候節、右者伏見奉行支配所之義ニ付、伏見奉行被御達被成候義と存候ニ付、右書付相改、差出候様其筋へ御達有之候様、御先方方へ先役より及御懸合候処、右日向宿所届之廉者除キ候御書付非蔵人差出候旨にて被遣候留書相見候ニ付、此度之義も伏見奉行へ御達被成候義と存候、且橋本安芸義、父駿河守方同居之趣ニ候得共、駿河守と申名前并是迄之住居於御役所難相分、藤嶋長門与申名前・住居共是又難相分、右者宿所之義いつ比相届候哉、改名等もいたし候義ニ候ハ、其訳夫ニ相認差出候様ニ候、

尤赤塚豊前・松室伊賀是迄之住居難相分御座候間、右書面書改差出候之様御達有之候様存候、依之被遣候書付返却いたし、此段得御意候、以上、

正月廿八日

尚以松室土佐当時之宿所届之義ハ、文化七申年九月廿九日各様より御達相済有之候義ニ御座候、此段得御意置候、以上、

右書付昨日伝奏方より御達候由ニ候、滋野井様雜掌坂本関之丞持参候也、昨日番頭中西和泉御招にて、右之写ヲ被相添置候間、定而今日品替り書改、此御方へ持参候間、伝奏方へ右本紙相済御差出有之候様被仰進也、尤当月ハ此御方御月番ゆへ也、昨日迄ハ滋野井様ノ御月番也、

滋野井家から届いた書付は京都町奉行より禁裏附に送られたものの写しで、次の3点が指摘されている。第1に、吉見壱岐は伏見に住んでいるので、伏見奉行へ提出してもらいたいという点。第2に、橋本安芸の父の駿河守の住居、藤島長門の住居は奉行所で確認できないので、改名したならその訳も含めて提出してもらいたいという点。第3に、赤塚豊前・松室伊賀のこれまでの住所も分からないので提出してもらいたいという点である。2月より久世が当番であるので、書き改めて武家伝奏にして提出するように求められて滋野井家から届いたのであった。その後、5日に番頭の松尾丹波が書き改め書付を持参したので、久世は滋野井に確認してもらった上で、武家伝奏へ提出している。

すなわち、宿所届・改名届は非藏人番頭→非藏人奉行→武家伝奏→禁裏附→京都町奉行と伝達されて、非藏人の管理を行っている。なお、このような宿所の変更や改名について、久世は「文化五年より始り候事にて、其以前者ヶ様ニくわしく御届ハ無之趣也」と記しており、文化5年（1808）以降、幕府への届の厳密化が進んだようである。

④非藏人の相続の管理。非藏人の相続に際して、非藏人奉行がどのように関与したか、どのような文書の授受が行われたかを見てみよう。

（文政9年12月26日条）

一、私義安永七年家督相続願之通被仰出、難有仕合奉存候、以御陰天明五年以来至今年四ヶ年余（ママ）小番不欠勤仕、難有奉存候、文化十一年十月悴宗堂別番被仰付、父子相並勤仕誠以難有奉存候、然ル処当春より痔痛毎々差起り、毎度小番不参仕奉恐入候、依之甚以奉恐入候御願ニ御座候得共、悴宗堂へ番代被仰付被下候様御願申上度奉存候間、何卒以御憐愍願之通被仰被下候ハ、難有奉存候、此等之趣 御奉行様へ宜御披露頼入存候、以上、

文政九戌年十二月

大賀肥後印

中西一（番頭）

—

—

—

右之通御願申上候間、宜御沙汰奉頼上候、以上、

文政九戌年十二月

松尾丹波印（番頭）

—
—
—

三室戸一（非藏人奉行）

—

右御月番甘露寺様（武家伝奏）へ御指出し候処、御落手也、

大賀肥後は当春より小番を不参することが多くなって息子へ番代を番頭へ願い出ている。そして、大賀からは奉行への「御披露」を依頼している。大賀の願書の奥書には番頭より奉行に宛てて、「御沙汰」を依頼する一文が加えられて、奉行に提出された。非藏人奉行はこの願書を武家伝奏へと提出している。

養子願いも同様の手続きが取られている。

（文政9年4月17日条）

一、参上

大賀伊賀

右久間太（久世家家臣）出会、願書差出、左之通、

奉願口上之覚

一、私儀年来多病ニ付、文政六年七月悴親宋江番代之儀御願申上、則願之通被為 仰付、難有畏入奉存候、然ル処親宋儀、其砌ヨリ病氣ニ而、只今以番御理申上候段、不願御慈恩次第、進退深恐入奉存候、無怠保養仕罷在候処、快復不仕、医業交相転候得共、何分難洩之病症ニ而、此上出勤之時節難斗奉存候ニ付、不容易重畳恐多御座候得共、右親宋儀無是非御暇御願申上、此度大西河内二男親和当年十二歳ニ相成候者ヲ養子ニ仕、家督相統御願申上度奉存候、何卒格別以御憐愍之御沙汰願之通被為 仰付被下候ハ、冥加至極、永世難有仕合奉存候、此等之趣、御奉行様江宜御披露頼入候、以上、

文政九年四月

安田対馬印

中西和泉殿

松室讃岐殿

大賀伊賀殿

松尾丹波殿

右之通御願申上候間、宜御沙汰奉頼上候、以上、

文政一

常加勢松尾丹波印

大賀伊賀印

松室讃岐印

中西和泉印

滋野井一雑掌中

久世一雑掌中

（先例など略）

右甘露寺様（武家伝奏）江被差出、尤滋野井様へも写三通被差出候事、

安田対馬の養子願を大賀伊賀が番頭に提出し、奉行への「御披露」を依頼している。そして、番頭が奉行の「御沙汰」を依頼する奥書を加えて、奉行に提出し、奉行は武家伝奏へ提出している。このように家督相続についてもその願書のやり取りに奉行は関与していたが、番頭と武家伝奏の間に位置するだけで、主体的な立場ではない。

なお、家督相続に際して、非蔵人の「呼名」については朝廷運営サイドが管理していたが、奉行はその仲介を担った。次の史料は蔵人北小路俊昌が九歳の息子を非蔵人に就くことを望み、認められた時に「呼名」を付けた時のものである²²⁾。

（安政6年7月23日条）

一、今日定加番之事伺定〈辰半刻参集也〉、依一番奉行参朝候間、武伝光成卿相招被申渡、
江蔵人男非蔵人家督相続出仕之儀願之通被 仰出云々、願書無返却、

（中略）

一、番頭呼名之事伺出〈本人未参勤無之前也、兼而番頭へ願書有之事云々〉、

石見（加墨）

志摩

四ツ折有上包ニと云

北小路江蔵人男 俊峰

右四ツ折附議卿伺之処、如左加墨返却、加墨方被仰出云々、

番頭へ申渡如例、

「呼名」の候補として石見と志摩を番頭が四つ折の紙で提示してきたので、「議卿（議奏）」に伺ったところ、石見のところに合点を付けて、こちらの方を「呼名」とした。ここでは「呼名」選定に議奏が関わっているものの、奉行は単に取れ次いでいるのみで、主体的な関与はうかがえない。

⑤年次提出帳簿の管理。「③非蔵人の宿所届・改名届の管理」で述べたが、毎年分限帳が番頭から非蔵人奉行を通じて武家伝奏へ提出されている。これは非蔵人の名前・国名・年齢が記された帳簿であり、堂上公家における補略、地下官人における地下次第と同様に、構成員を朝廷運営者が管理するものであった。その他にも次のような記述が見られる。

（文政9年4月2日条）

一、廣橋様（武家伝奏）より御招、使者勇被差出候処、院非蔵人・非蔵人高付割付帳壹冊 昨年差出候ノヲ被相渡、来ル八日迄ニ書改被差出候様ニとの事也、

（同月3日条）

一、滋野井様へ右帳面為持被遣、其上ニて非蔵人口へ向、罷越番頭ニ面会、大賀伊賀（番頭）へ相渡、右之趣申達候処、奉畏候也、

（同月7日条）

一、参上 細川武蔵

右者地行高付帳面書付今日伝奏廣橋様へ差出候処、御落手之旨御届申上候由也、

（同月16日条）

一、廣橋一位様より御使、非蔵人知行付帳貳冊為持罷越、右帳面二年号・月等無之、尤昨

22) 前掲註19『安政五年非蔵人奉行』。

年御見落しニ而御座候ニ付、相認差出候様御下知之儀被仰渡、（中略）

4月2日、久世通理が武家伝奏より招かれ家臣を派遣したところ、院非蔵人と非蔵人の「高付割付帳（知行高付帳）」を渡されて、書き改めの上、8日までに提出することを求められた。翌日、久世家家臣が同役の滋野井へ持参し、また、その足で禁裏の非蔵人口で番頭大賀伊賀へ書き改めを求めている。7日に細川武蔵が久世家を訪問して、「高付割付帳（知行高付帳）」を武家伝奏へ提出した旨を告げてきた。なお、この細川武蔵常之は番頭ではないものの、番頭大賀伊賀宗跡の孫である宗将が細川武蔵常之の実子という関係に基づくものと推測されるが、ここでは締め切り直前のためか非蔵人奉行を経ずに直接武家伝奏へ提出している。なお、後日帳面に年月日の記載がなかったことから加筆を求めるため武家伝奏より使者が久世家を訪れている。

また、宗門人別帳についても見てみよう。

（文政9年10月25日条）

一、参上 中西和泉（番頭）

右者宗旨帳面持参候处、御落手申答ル、直様伝奏御月番廣橋様へ指出し候处、少々書損有之二付、御差戻候事、

一、非蔵人口江番頭罷出候様御使を以申入、則中西和泉参上、久間太出会、右帳面書改申渡候事、

番頭中西和泉より宗門帳が久世家に届き、武家伝奏へ提出している。「直様」とあることから非蔵人奉行側で十分なチェックなどは行われなかったのであろう。宗門帳の書き損じが指摘され、差し戻されてしまった。そこで禁裏の非蔵人口に番頭を呼び出し、久世家人宮崎久間太から書き改めを指示し、再び、番頭より提出された。

⑥非蔵人小番結改の管理。宮中に出仕する堂上公家の禁裏小番も「結改」と称するが、それと同様に非蔵人の出仕に関して誰が務めるかということや「結改」に伴う文書を非蔵人奉行が担った。

（文政9年12月19日条）

一、参上 松室讃岐

左書付持参

二番 羽倉淡路

元四番

自明廿日帰番参勤仕候、

二番 藤嶋隠岐

元四番

三番 鳥居南上野

右来廿二日差替参勤仕候、仍御届申上候、以上、

十二月十九日

中西和泉

松室讃岐

大賀伊賀

常加勢松尾丹波

右本紙御持参にて即刻御参 内也、御扣壺通滋野井様へ為持被進也、
(文政10年2月朔日条)

一、参上 大賀伊賀

右者明日より小番結改之一巻并御扣書二通持参之处、御落手被遊候也、

番頭が持参した結改の届書を久世が参内して提出している。提出先は実際の天皇に近侍する非蔵人結改であることから、武家伝奏ではなく議奏と思われる。「結改」の文書や新しく出仕の番組が変わった際の文書などは非蔵人奉行に提出された。

以上、非蔵人奉行の役割を文書作成・授受に注目して検証した。①非蔵人の出勤管理、②武家伝奏からの幕府触・雑掌触伝達、③非蔵人の宿所届・改名届の管理、④非蔵人の相続の管理、⑤年次提出帳簿の管理、⑥非蔵人小番結改の管理の6点を見てみたが、非蔵人奉行は朝廷運営サイド（武家伝奏・議奏）と非蔵人番頭との間に位置し、文書の伝達を担ったものの、主体的な活動は確認できない。

4. 非蔵人奉行の役割の展開

非蔵人奉行の役割を文書作成・授受を見る限り、彼らの主体的な活動は確認できない。しかし、奉行が単なる朝廷運営サイド（武家伝奏・議奏）と非蔵人番頭との間の文書を伝えるだけの役割であったかという点、その役割を逸脱するような動向も確認できる。ここでは2点について見てみよう。

①天明3年（1783）即位装束料拝領の願い。次の史料は天明3年5月13日に非蔵人奉行に就任したばかりの平松時章が記した『非蔵人奉行雑記』である²³⁾。

(天明3年6月19日条)

依当番未半刻参 内、吉見三河・中川加賀等謁、予申聞云、先達而
(貼紙)

「願書差出候就御即位非蔵人一統装束料拝領之儀、于今御沙汰無之、一統困窮難済ニ付、何とそ以御憐愍速御沙汰有之一統拝領之事相願候旨也、尤先達而遂願二度迄差出候上ニ候得者、今更願書差出候儀茂恐入候由申之、何分宜沙汰之儀頼入候旨申之、後水尾院已来御代々拝領連綿之書付一紙見セ了、予返答云、委細承知、尚相奉行へも示含之上、伝奏」
衆へ可及相談旨申了、一紙ハ愚宅へ可差出旨申聞了、何事ニヨラス願筋 禁中ニ而番頭共申聞候節、願書披見之上、尚 [] (虫損) 亭へ可差出旨申了、是奉行先輩之説也、イカントナレハヤ、モスレハ奔走ヲイトヒ、序ヲ以面会ノ節仕舞様ニ形付テハ奉行ヘノ失礼也、夫故披見而已ニ而、不可請取旨橋本前亜相口授也、装束料之事、頃日梅園前相公（非蔵人奉行）も噂有之、番頭共催促申聞ルトイヘトモ、彼卿取斗ニ而二度迄遂願も差出候上之事故、伝奏衆へも被談候処、於彼方油断無之候得共、関東より未済来候間、不能所存旨、両卿被示候旨番頭へ被申聞、余り段々之義、於彼卿難被申、夫尤、是非之旨番頭へ被申聞候旨噂也、

(同月21日条)

23) 前掲註13『非蔵人奉行雑記』。

梅園前相公来臨、（中略）装束料一件申談了、彼相公被申云、従先達而両度迄遂願も差出候上、今ニ御沙汰無之、一統困窮尤之義被存候間、此上者兩人一所ニ伝奏衆へ面会ニ而、及相談可然哉之旨被申、予同意了、然者近日参内之次可然、廿四日彼卿当番、予も当番旁可宜之旨約諾、被帰了、

平松は禁裏において番頭に面会して、即位の際に非蔵人一統へ装束料を拝領することとなっているが、いまだにその沙汰がないので宜しく頼みたいという話を受けた。その際、後水尾院以来装束料を拝領している書付を渡されている。ここで興味深いのは、禁裏で番頭より願いがあった場合、願書を披見した上で奉行の邸宅へ持って来させるのが「奉行先輩之説」であり、願いの筋に対して奔走しなかったり、ついでの時に片づけるようなことは「奉行へノ失礼」であり、わずかに願書を見て、受け取るようなことをしてはいけないと「奉行先輩」である橋本が述べていると記している。つまり、単に朝廷運営サイド（武家伝奏・議奏）と非蔵人番頭との間の文書を伝えるだけではなく、非蔵人に対する「奔走」が求められていることがうかがえよう。実際、今回の即位における非蔵人一統への装束料拝領の願いでは、同役の梅園が2回も武家伝奏へ依頼している。

なお、21日に至って、平松は梅園と会談して、24日の禁裏小番の際に武家伝奏へ相談することを約束しているが、この後の記録がなく、また武家伝奏（油小路隆前・久我信通）の記録も確認できないため、実際に拝領できたかどうかは判然としない。

②文政9年藤島栄心院の息子の不埒をめぐる願書。次の史料は久世の日記に記されたものである。

（文政9年2月24日条）

一、藤嶋栄心院・付添野原左兵衛兩人参上、久馬太面会候処、家内之義願書持参候共、番頭之奥印も無之ニ付、御取上無之趣にて差返候処、此義ハ致し方無、内々口上にて悻悻隠岐不埒之筋、一切米等不差送、甚以不幸之次第色々申立、此義共ヲ番頭被召、御内命にて被仰付被下候ハ、難有由願ニ候得共、此義ハ先日以来滋野井様御掛リにて、番頭被召被仰付候御次第も有之候事ゆへ、先滋野井様へ願出可然候旨申聞候得共、何より此御方へも宜願置候事、

非蔵人藤島隠岐廣徳の母親である栄心院と付添人が久世家を訪問して、久世家用人宮崎久間太と面会し、願書を提出してきたものの、番頭の奥印がなかったので提出をできなかった。そこで内々に息子が不埒であり、一切米などを送ってくれないので、このことを番頭より指摘するよう命じてもらいたいというものであった。用人は同役の滋野井が月番なのでそちらに願い出た方が良くいと述べたが、栄心院は久世へも宜しくお願ひしたいと訴えてきた。

このことから非蔵人のみならず、非蔵人の家族においても番頭への「御内命」を期待できる存在が奉行ですあったものと目される。この願いについても他に関係する史料が確認できないため、どのような結論に至ったかは判然としない。

以上、2点ではあるが、非蔵人奉行のイレギュラーな活動について確認した。奉行が単なる朝廷運営サイド（武家伝奏・議奏）と非蔵人番頭との間の文書を伝えるだけ存在ではなく、非蔵人への「奔走」や番頭への「御内命」などが期待されていた。なお、非蔵人からの願書につ

いては『非蔵人往反之備忘』に次のように記されている²⁴⁾。

一、諸事願之儀、從番頭書附一覽了落手之由申返〈書付留置写落手了〉、非番之方遣〈青侍使也〉、一覽了無所意之旨被示、其上月番伝奏江出候事、

願書は番頭より書付を受け取って一覽した後に落手した旨を伝え、非番の奉行へも伝達することとなっている。ここでは願書はあくまでも番頭から伝えられるものとして位置付けられており、非蔵人本人（②では非蔵人の母）から渡されるべきものではないことがうかがえるが、「内々口上」での相談なども可能な状況であったと評価できよう。

おわりに

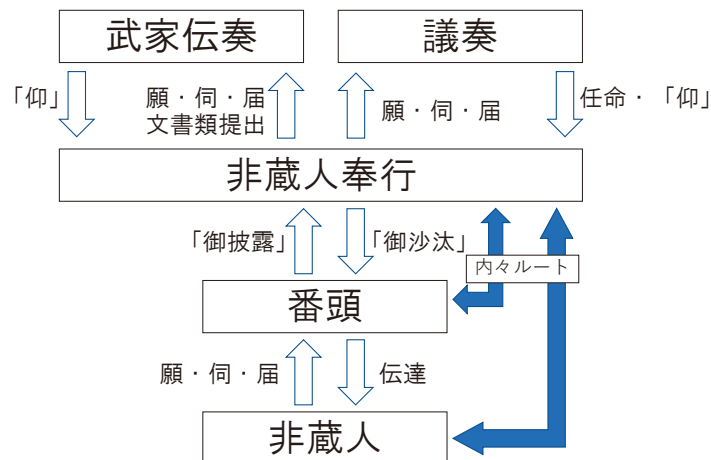
本稿最後にまとめをする。

第一に、非蔵人を管轄する非蔵人奉行は堂上公家の役職で、公卿が任じられた。確認できる限りでは羽林家の家格から就任されることが多く、30歳代に就任しているが、近世後半になるほど高齢化の傾向がみられる。なお、摂家・清華家で務めている者はいない。

第二に、非蔵人奉行の文書実践から確認できる役割は、①非蔵人の出勤管理、②武家伝奏からの幕府触・雑掌触伝達、③非蔵人の宿所届・改名届の管理、④非蔵人の相続の管理、⑤年次提出帳簿の管理、⑥非蔵人小番結改の管理である。非蔵人奉行は朝廷運営サイド（武家伝奏・議奏）と非蔵人番頭との間に位置し、文書の伝達を担ったものの、主体的な活動は確認できない。一方で、『非蔵人往反之備忘』のような業務を遂行するたの記録が転写されて遺されていることは重要であろう。

第三に、文書実践の点からは非蔵人奉行の主体的な活動は見られなかったが、何か問題が生じた際、非蔵人より「内々」「御内命」などが期待されていた。以上を踏まえると、図のような組織であったことがうかがえる。

なお、本稿では非蔵人組織の中に非蔵人奉行を位置づけたが、研究課題として遺されている朝廷の諸奉行の中での位置づけも不可欠であろう。



24) 前掲註9 『非蔵人往反之備忘』。

